



堀川の岩井橋

名

古屋市街の中心を南北に流れる堀川は、物資輸送用の運河として慶長十五（一六一〇）年の名古屋城築城とほぼ同時に着工された。左衛門太夫を称した福島正則が工事にあたったので、大夫堀とも呼ばれるらしいが、いまは淀んだ川でしかない。むこうから歩いてきた普通っぽいお兄さんの腕に、本格的な刺青がびっしりあったと同行者がいう。浮浪者も道端にへたり込んでいるし、とてもうろんな雰囲気だ。しかし、目的の岩井橋はこの川に架かっているから仕方がない。

岩井橋は日本初期の鋼製アーチ橋で、大正十二（一九二三）年九月に竣工した。橋長三〇・〇m、幅員は二九・五m。大正八（一九一九）年の近代都市計画に基づく五大幹線道路の建設において、第一号線に指定された現在の岩井町線に架けられたのが岩井橋であり、意匠設計には建築家の武田五一、設計と制作には橋梁技術者の関場茂樹が関与した。

武田五一は、日本近代建築黎明期の辰野金吾や妻木頼黄などに続く第二世代の建築家であり、アーチ・スローパー、セセッションなど、新しいデザインを日本に紹介した。また関場茂樹は、アメリカ留学で身につけた橋梁技術を日本に持ち込み、大正三（一九一四）年にわが国最初期の「標準橋梁仕様書」

をまとめるなど、日本の近代橋梁史上において業績を残した。この二人に設計を託した名古屋市の気合が察せられる。

さらに側面に取り付けられた飾り板は、現存する戦前の橋としては唯一ここにしかないという。そのような次第で見物に來たのだが、予備知識がなければ、素通りしていただろう。可もなく不可もなく、普通の橋にしかみえない。

見どころの飾り板はスパンドレルにあり、小さなアーチを連続させ、アーチ端部にクルツと巻き毛のような意匠が施されているが、この橋梁全体を引き立たせているとは思えない。とくに巻き毛部分は、なくてもいいだろうと感ずる。

この橋の設計から数年後に、武田は「橋梁の外観」という講演で、美しい橋を造るための考えを述べており、たとえば装飾については構造部の要点を明らかにするためか、美しくない弱点を補うためぐらいしか、原則としてやるべきではないという。岩井橋の飾り板はどちらに基づいているのだろう。

また、日本の有名な建築や橋梁の径間の長さの割合などは、いずれもダイナミック・シンメトリーに適合し、多くは1と $\sqrt{2}$ の割合となっているので、設計のときこの比を応用して径間の長さの比、高さの比、

その他各細部の比を決定していったら必ず面白い結果を得ることができると思う、などと述べている。

しかし、彼の建築作品を見ると、まとまりが悪く、細部の意匠は凝っていても、とってつけたような感じがするものが結構ある。豊潤な理論にセンスが追いついていないということか。岩井橋については、近くに用があればついでに寄ってみましょう、という程度にはお勧めしたい。



岩井橋

[交通] 名古屋駅から堀川沿いを徒歩約30分

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi